

# 数学の「ジャーナリスト・イン・レジデンス」(JIR) プログラム

藤原 耕二  
京都大学数学教室

## § 1 なぜ、このようなプログラムを始めたのか

2009年の暮れに、いわゆる「事業仕分け」において科学技術関係の予算の削減が取り上げられ、その結論に対して、森重文先生を含む方々が懸念を表明する声明を発表されたことを記憶されている方は多いと思います。私も大きな危機感を感じた一人ですが、何より不合理だと感じたのは、このような重要な決断（削減と復活のどちらも）が、十分な事実に基づいて判断されていないということでした。

それが一つのきっかけとなり、日本数学会理事長（当時）の坪井俊先生に、数学のアウトリーチに関する一つの可能性をお伝えしました。それが「ジャーナリスト・イン・レジデンス」(JIR) というプログラムです。内容は、ジャーナリストやライターの方に数学教室に二週間程度滞在していただき、その間に自由に取材、執筆活動を行ってもらおうというものです。数学の研究について正確かつ多様な情報が、それぞれの媒体を通してプロにより世間に伝えられ、結果として数学のサポーターが増えることは長期的にみて大変重要だと考えています。

さて、科学におけるアウトリーチ活動の重要性は既に十分に認識されていて、実際、いろいろな活動があります。サイエンスカフェ、出前授業、公開講座などです。これらは研究者自らが行うものですが、一方、新聞報道、雑誌、テレビ番組、映画など、専門の担い手によるルートもあります。そもそも、数学（科学一般でも同様）について伝える場合、伝える内容についての専門知識と伝えるスキルの両方が必要となりますが、この二つを兼ね備えた人材を生み出す仕組みが少ないという構造的な問題があり、したがって深刻な人材不足があります。確かな統計は知りませんが、ジャーナリズムに関わる人材には文系出身者の方が多いようです。長期的には、より多くの理系出身者がジャーナリズムの場に職業選択をすることは重要だと考えますが、現状に対する処方箋の一つとして JIR を始めました。

ところで、このようなレジデンス＝滞在型のプログラムは日本では目新しいものですが、私自身は、バークレー（アメリカ）にある数理科学研究所（MSRI）が以前、このようなプログラムを実行しているのを知っていて興味深く思っていました。また、ジャーナリズムではありませんが、「アーティスト・イン・レジデンス」と呼ばれる芸術活動を滞在型で支援するプログラムは日本にも幾つか存在します。

## § 2 プログラムの準備と概要

坪井先生からプログラムを実現するよう後押しを頂き、プログラムの概要をまとめ、2010年9月には、坪井先生にも協力していただき、いくつかの数学教室にプログラムの受け入れが可能か打診をしました。プログラムは直接、個別の研究に関わるものではないので、科学研究費とは馴染みにくく、運営費交付金や外部資金から費用負担をすることになります。それで、まずはグローバル COE を獲得している教室を中心にお願ひしました。幸い、いくつかの教室から好意的な返事をいただきました。

2010年秋の学会（名古屋大）の記者会見で、JIR について簡単な説明をしていただき、また、日本数学会の数理科学振興ワーキンググループもプログラムに協力してくれることが決まりました。そのあと、日本数学会に頂いたリストを参考にしながら、新聞社、出版社などプログラムに興味を持ってくれそうな団体や個人に広報活動を始め、10月15日に数学会本部でJIRの説明会を行い、多数の方にお集まりいただきました。

プログラムの参加者は公募によりますが、応募書類には経歴をはじめ、応募の動機や滞在中の計画や参照者の名前も挙げていただき、適任者と判断すれば、ご本人の希望に沿って滞在機関へご紹介します。その上で、受け入れ機関が受け入れを決定すれば、プログラムを実行していただきます。このプログラムは長期的な効果を狙ったもので、滞在中は参加者が自由に取材をし、アウトプットも決まったことを要請しないことを原則としています。

プログラム参加に興味を持ってくれる方は多数いましたが、一番の問題は、プログラムが滞在型である、という点でした。それぞれの場の第一線で活躍されている方が、2週間程度、職場を離れることが、そもそも容易ではないのです。さらに、それが可能であったとしても、果たして2週間も仕事を中断して参加することに見合うメリットがあるのかという疑問もありました。一方、私としては、滞在型という点がプログラムの本質なので、その点だけは大事にしたいと考えていました。

結局、平成22年度は8人の方が、延べ10箇所（8機関）に滞在し、受け入れ機関にも参加者にも概ね良い評価を頂き、同じような形式で平成23年度、24年度とプログラムは3年目を迎えます。これまでに延べ20人以上の方が、延べ30箇所以上の機関に滞在しました。プログラムの形式は、数学に限らず、他の研究分野のいくつかでも実現可能だとは思いますが、このプログラムについては数学を中心として展開しています。幸い、受け入れ機関は多様性を増してきて、たとえば、理化学研究所、東大生産技術研究所もプログラムに参加しています。

加えて、参加者の職種も多彩で、これまでに、テレビ番組制作者、新聞記者、通信社の方、フリーライター、編集者、漫画家、カメラマン、翻訳家などの方が参加しています。したがって、参加者のプログラム参加の動機、数学に関する興味も多様です。私自身は、プログラムを始め

るにあたり、数学の研究について分かりやすい言葉で世間に伝えてくれる担い手が増えてほしい、その一助になりたいと考えていました。実際の参加者と話してみると、その興味は、数学の研究内容そのものだけでなく、数学者の人となり、研究の仕方、論文執筆や投稿の仕組み、研究集会の役割、教室や研究科の運営、図書や事務の役割、数学の全学教育への取り組み、数学科の専門教育、数学における社会人入学、数理ファイナンスなど実社会との関わり、数学研究と外部資金、数学と周辺分野との関わりなど限りがありません。

### § 3 滞在の記録

幸い、今までに延べ 24 人の方が、延べ 40 を超える機関に滞在しました。標準的な滞在期間は 1 - 2 週間です。ここに 3 年間のプログラムの内容を記載します。ウェブページも参考にしてください。

#### ● 平成 22 年度

受け入れ機関（順不同）

東京大学大学院数理学研究科 GCOE「数学新展開の研究教育拠点」、東北大学大学院理学研究科数学専攻 GCOE「物質階層を紡ぐ科学フロンティアの新展開」、明治大学先端数理科学インスティテュート GCOE「現象数理学の形成と発展」、九州大学大学院数理学府 GCOE「Math for Industry」、東京工業大学大学院情報理工学研究科 GCOE「計算世界観の深化と展開」、京都大学大学院理学研究科数学専攻・数理解析研究所 GCOE「数学のトップリーダーの育成」、名古屋大学大学院多元数理科学研究科。（なお、東京大学生産技術研究所数理生命情報学 合原一幸研究室 最先端数理モデル連携研究センターと大阪大学大学院理学研究科数学専攻も受け入れに興味を示した）

参加者と滞在先（敬称略、順不同）

春日真人（NHK）：京大。 長谷川聖治（読売新聞）：東大数理，東北大。

浅見英一（共同通信）：東大数理。 里田明美（中国新聞）：九大。

三輪佳子（フリーライター・筑波大学大学院）：東大数理。

荒船良孝（フリーライター）：名古屋大。

神谷由香（フリーライター・エディター）：東大数理。

高森英昭（科学技術ライター）：東工大。

#### ● 平成 23 年度

受け入れ機関（既出の場合詳細略）

東大数理 GCOE，理化学研究所 脳科学総合研究センター（BSI）甘利俊一研究室，明大先端数理インスティテュート GCOE，東工大情報理工，名大多元数理，京大数学・数理研 GCOE，九大数理 GCOE。（なお、東大生産技研 合原一幸研究室も受け入れを表明）

## 参加者と滞在先

里田明美（中国新聞）：九大数理，東大数理。 三輪佳子：東工大。  
春日真人：京大，理研 BSI。 富田智（エディット出版）：名大多元。  
荒船良孝：明治大。 長谷川聖治：明治大。

### ● 平成 24 年度

#### 受け入れ機関：

東大数理 GCOE，理研 BSI 甘利俊一研究室，京大数学・数理研 GCOE，九大数理 GCOE，東大生産技研（合原一幸）研究室，東北大学 WPI 原子分子材料科学高等研究機構（AIMR）数学ユニット，名大多元数理。（なお，東工大情報理工も受け入れを表明）

#### 参加者と滞在先（予定を含む）

鈴木クニエ（勁草書房）：東大数理，京大。 富永星（星翻訳事務所）：京大，東北大 AIMR。  
内村直之：東大数理，京大。 古田彩（日経サイエンス）：京大，名大多元。  
長谷川聖治：理研 BSI 甘利研，東大合原研。  
亀井哲治郎（亀書房）・河野裕昭（フリーカメラマン）：東大数理，京大。  
春日真人：京大。 小林早野（理系漫画家）：東大数理。 三輪佳子：九大，東北大 AIMR。  
Kenneth Chang（ニューヨークタイムズ）：京大（理学部）。

## § 4 関連する活動

プログラムに関連するいくつかの活動を記録します。

- 「数理科学におけるジャーナリスト・イン・レジデンス・プログラムについての研究会」，  
2011 年5 月27 日～5 月29 日，東京大学玉原国際セミナーハウス。  
東大数理GCOE事業「数学新展開の研究教育拠点」（東京大学）の援助のもと，「JIR参加者および受け入れ機関担当者から実施状況の報告，今後の研究課題の提起を受け，討議する。今後のジャーナリストと研究者の双方向的関係の構築のための提言をまとめる」ことを目的とした。
- 「数理科学におけるジャーナリスト・イン・レジデンス・プログラムについての研究会  
2012」  
2012 年6 月22 日～6 月24 日，東京大学玉原国際セミナーハウス  
前年と同じような趣旨。
- 「ジャーナリスト・イン・レジデンス 談話会」  
2012年12月6日 午後1時～2時30分，京都大学数学教室。  
JIR参加者と理系大学院生の交流と討論を目的に開催。

## § 5 むすび

始めに書きましたように、数学の最先端について分かりやすく伝えてくれる担い手の育成に貢献したいと考えて、JIRを始めました。私自身は、科学コミュニケーションについては素人ですし、プログラムの目的や効果について明確な考えがあったとは言えませんが、お蔭様で、3年間で多くの滞在を実現することが出来ました。その経験の一部を会員の皆様と共有したく2013年3月の年会でパネルディスカッションを行います。まとまった結論や提言があるわけではないのですが、皆さんご自身が考える手がかりになるのではと期待しています。

言うまでもなく、プログラムは多くの方に支えられています。受け入れ機関と世話人の先生方、プログラムの参加者に加え、取材に協力して下さった数多くの会員、理事長（坪井俊先生と宮岡洋一先生）と事務局の方々をはじめ、日本数学会に感謝します。

プログラムのページ

<http://www.math.kyoto-u.ac.jp/~kfujiwara/jir/jir.html>

## お知らせ

プログラムに関するパネルディスカッションを2013年3月に開催します。

科学ジャーナリズムに興味のある会員や学生の方々の来場をお待ちします。また、展示場も設置し、河野裕昭氏による写真なども展示予定です（詳細は年会プログラムのページ（P. 6）で確認してください）。

### パネルディスカッション「数学教室に滞在して考えたこと」 —ジャーナリスト・イン・レジデンスの報告—

日本数学会 2013 年度年会（京都大学）

日時：2013 年 3 月 20 日（水曜）午後 1 時—2 時

会場：吉田南総合館共北 38 講義室

司会：藤原耕二。

パネリスト（敬称略）：坪井俊（東大），谷口説男（九大），深谷賢治（京大），小島定吉（東工大），河野裕昭（カメラマン），亀井哲治郎（編集者），富永星（翻訳家），長谷川聖治（読売新聞），浅見英一（共同通信）。